The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

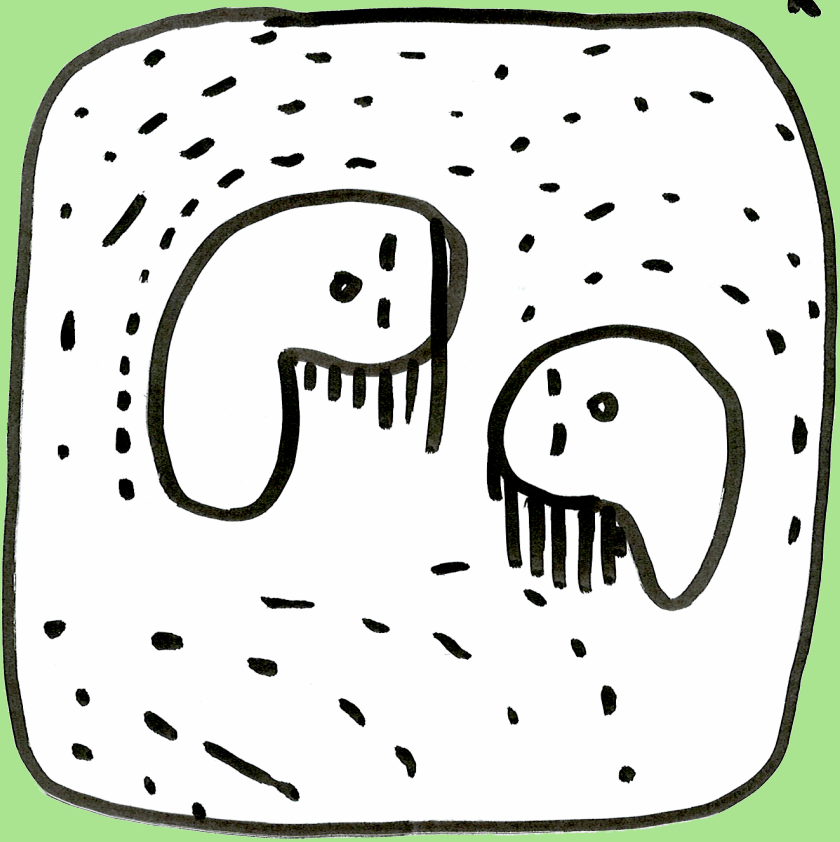
Title	特集2 ： 洛星高校での授業「臨床哲学」
Author(s)	桂ノ口, 結衣
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 63-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68183
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

洛星高校物語



山本聖人　「洛星と私」

荻野亮一　「ひとと会う、外に出る、ともに生きる」

川崎晴香　「洛星高校での取り組みについて」

小泉朝未　「洛星での実践の経験」

特集２：洛星高校での授業「臨床哲学」

臨床哲学研究室のメンバーが、京都の私立高校である洛星高校へ「臨床哲学」の出前授業をおこなう営みは、2004 年から続けられています。2011 年に発行された『臨床哲学のメチエ vol.17』でも、当時の洛星高校での授業について特集が組まれています。書かれているものを読むと、そのころ、学部生も含め 10 人ものメンバーが関わっていたこと、その 10 人でたとえばどのようなことを行い、それぞれがどのようなことを感じ考えたのかを垣間見ることができます。

わたしの記憶では、当時は授業前後にしばしばミーティングが行われてもいました。また映像記録をとり、授業内容について振り返っていた時期もあったように思います。ミーティングの内容は、オープンなメーリングリストや、金曜６限の授業において共有される機会をもっていました。

いつからか、なぜだか、洛星高校に関して互いに共有する機会は、うんと減りました。現在は、洛星高校にいったい誰が関わっていて、たとえばどのようなことをしており、どのようなことを感じ考えているのか、直接関わっている人以外はおよそ知り得ないがそういうものだ、という感じのプロジェクトになりました。

そういうものなのかな？とわたしは思います。なにもかも丸見えにする必要はありませんが、「いっしょに考えられるわからなさ」を探すこと、そのための土壌をつくること、という、てつがくエクササイズを放棄する必要もありません。

そしてまた、そういうものでいいのかな？ともわたしは思います。見えないものは、ないものにされてしまうことがこんなにも多いって、わたしたちは知っているのではなかったでしょうか。「問題」も「傷つき」も、きっと無邪気に、ないものにしつづけてきました。

この特集では、前回特集以後の洛星高校では「臨床哲学」という名の授業でたとえばどのようなことを行い、それぞれがどのようなことを感じ考えたのかを、書いていただきました。もしかすると今年度限りで終わることになるかもしれないこの出前授業についての原稿を読むことが、話し、聴きあうところからてつがくを始める練習のひとつとなることを、そしてこの６年間、わたしたちが何をないものにしてきたのかをきちんと見る契機となることを願っています。

山本聖人さんは、複数年度洛星高校に関わっておられました。それぞれの年度について、山本さんがどのように関わり、どこに引っかかっていたのかを、現在の高校教諭であるご自身の目線から書いてくださっています。それを読む自分はどこに引っかかるか、きっと確かめることができます。

荻野亮一さんの原稿には、市場化された教育への問題意識から、アートで／アートを学ぶ臨床哲学へとどのように繋がっていったのかが書かれています。授業への真摯さと「私は生徒の名前をひとりも思い出すことができなかった」という告白との両立には、共感と同時に、考え始めたいわからなさがあります。

川崎晴香さんは、ジェンダーも関連した「やりにくさ」「怖さ」に言及してくださいました。それを話すこと自体に困難を抱える問題をこうしてひらいてくださったことに、まずは感謝が尽きません。こうした「やりにくさ」「怖さ」について、わたしたちは一緒に考える機会をいかにもっていなかったかを読みたいと思います。

小泉朝未さんの稿を読むと、仲間とともにわからなさと付き合いながら、そこにたしかに「面白さ」もあることが伝わってきました。そして、ああ、見えないものにしつづけて、ないものにしつづけてきたのは、「面白さ」もそうだった、と気づきます。

共有するということ、互いに見えるようにすること、それはなにをすることなのだろうと考えつつ。（かつらのぐち）